

大山鳴動して鼠一匹で良かった

第一生命経済研究所 常務取締役経済調査部長 佐久間 啓

「大山鳴動して鼠一匹」という故事ことわざを知っている人は多いと思う。「大山」は「泰山」とも表記するらしく、その「泰山」が中国に実在することからこの故事も中国伝来と思われることが多いらしいが、元々は西洋のことわざである。一般的に、事前の大騒ぎ(期待)の割には大した結果が出なかった場合に使うものである。また、「何だ大騒ぎ(期待)した割には大した結果が出なかった。大騒ぎ(期待)する必要もなかったではないか。人騒がせな話だ。」というかたちで、大騒ぎ(期待)したこと自体をマイナスに捉える場合に使うことが多いと思う。

世の中を見渡してみると、事前の想定どおりの結果が出る問題は意外に少ないのではないだろうか。特に経済は刻々と変化している生き物であり、物事の因果関係もまだ解明されていないことが多い。だから事前に「これは大事になりそうだ」、「これは変化の予兆では」と思いいろいろ調査、準備をして待っていても、結果何事もなかったといったことはよくあるものだ。

さらに困るのはこの「これは大事になりそうだ」、「変化の予兆では」ということが繰り返し起きるということだ。「前回は事前にばたばたといろいろやったけど結局何事もなかったから今回も大丈夫、どうせそれ程大したことは起きないから起きてから手を打てばなんとかなるさ。」と慢心していると本当に大事になったり、大きな変化が起きて上手く対応できなかつたりする。

筆者は資産運用の現場に長く携わってきたが、そこでは「大山鳴動して鼠一匹で良かった」と考えることが大切だと教えられてきた。これには二つの意味があると理解している。

例えば注目すべきイベントが予定されているとき、過去に似たようなことがあったか、そのときマーケットはどう反応したかということ

調べるのは基本的な行動だが、ここで大切なことは、前回同じようなことが起きた時はこれこれこういう結果になったので今回も同じことが起きると単純に判断しないことである。運用の経験から学んだことは「同じようことは何度も起きるが同じことは滅多に起きない。」ということだ。必ず直近の環境を踏まえて大山を鳴動させる必要があるということだ。もしかしたら前回とは違う鼠が何匹も出てくる可能性があるので手を抜くなという教えなんだと思っている。

同じようなことが何度も起きることから「あれ?何かおかしいぞ」と思ったときに、今回も大したことにはならないだろうからあまり騒ぎたてる必要はないと勝手に判断して、それ以上深く調べたり考えたりしなくなる危険もある。それを戒める意味で、もしかしたら大事になるかもしれないぞと騒ぎ立てたものの結果何事もなかったとしても、それをポジティブに捉えることが大切と教えているのだと思う。事が起きてから焦って対応を考えても効果的なものは出てこないし、リスク管理の観点からも事前にいるいろいろ想定しておくことは必要なことだと思う。

危機と言われるマーケットの変動は突然起きているようで振り返れば幾つかのサインが出ていることが多い。そして多くの人がそのサインの存在自体は認識していたということはよくある。にもかかわらず、危機が起きると多くの人が右往左往してしまうのが現実である。

変化し続けているものを正しく理解することは非常に難しいものである。しかし「あれ?何かおかしいぞ」と思ったときには予断を持たず注意深く意味を探る、議論をする、つまり少し「騒いでみる」というプロセスを続けることが危機に繋がるサインを見逃さない道だと思う。

「今回は大山鳴動して鼠一匹で良かったじゃないか」と言える空気を残しておきたい。